

「栄養教諭を対象とした食育意見交換会」講演概要

「全学年農作業を通じての食育及び地域とのかかわり」

学校法人盈進学園盈進中学高等学校参与
(元福山市立新市小学校校長) 山田 和孝 氏

◇プロフィール

平成13年～福山市立曙小学校校長、平成18年～新市小学校校長在籍中、児童に対し食育を通じた農業体験と地域住民とのかかわりを実施する。特に新市小学校では、全校生徒が学年ごとに作物を栽培する農業体験と民泊体験を実施し、子ども達の自己肯定感・コミュニケーション力・価値判断力等を高める取組を行う。現在は現職の他、県内の小・中学校社会科の共同研究者として教育研究を進めながら、みかん・イチジクの栽培に勤しんでいる。

1 栄養教諭の学校での位置づけ

「食育」は、朝ごはんの大切さや食べものに対する感謝の気持ちを伝えるだけでなく、生きる力・表現力・自己効力感をつけることができる。食育だけの授業が難しいのであれば、食育を他教科にどう繋げていくか。例えば、社会科、道徳、総合的な学習の時間、生活科、理科等で食育をいくらかでもクロスさせることが出来る。食育を担う栄養教諭が学校の教研活動に入っていくことが大事であり、栄養教諭が中心となり学校態勢で取り組まなければならない。

2 子どもをとりまく社会の厳しさ

今の子ども達の状況として、就学援助・児童虐待相談件数の増加、親と子の希薄な関係、いじめ・体罰・自殺の報道が取り沙汰されている。また、不登校・学校崩壊・じっと座ってられない子が増えているが、私たちはどうすればいいのか？まずは子ども達の阻害要因をしっかりと捉えるなかで、食育と地域のつながりを通して子ども達の豊かな心、コミュニケーション能力、判断力を高めていきたい。子ども達の心の土台を小学校の早い段階でしっかり身につけさせるべきで、小・中学校の連携も大切だが、幼・小学校の連携に重点を置き、小さい時から社会で主体的に生きていくための「基」をしっかりと身につけるべきである。

3 3つのL

36年間の教員生活の中で、大切に考えてきた3つのL。

- ・How to learn 　いかに学ぶか、どう学ぶか
 - ・How to love 　いかに人を認めるか、いかに人を好きになるか
 - ・How to live 　人としてどう生きるか、どう生きることが大事なのか
- これを追求しないと、いくら知識を得ても役に立たないのではないか。

「How」を「Why」に置き換えて考えてもよいのではないか。すなわち「なぜ学ぶか」、「なぜ人を好きになるか」「なぜ生きるか」。

子ども達がどんな時代にあっても主体的に生き抜く力を育てたい、常に謙虚さを忘れず意欲的に行動して欲しい。そのためには、我がふるさとと家庭に愛着と誇りを持たせることが鍵となり、その方法として自然体験をさせることが有効的である。

4 忘れられない3つの思い出

私の心に今も大切に刻み込まれていることは50年前の3つの経験で、それが今の私の心の土台となっている。

- ・中学校の弁当の麦ご飯

麦ご飯を炊くとき、麦は軽いので出来上がったときに上の方に集まる。母は羽釜の底の方のご飯を私の弁当につめてくれる。母の私に対する深い愛情が今もしっかり心に残っている。

- ・近所の方からの心のプレゼント

私の家では、よく海にあさりを取りに行き、その都度近所の人に持って行っていた。そしたら、その近所

の人達がなんとも言えない嬉しい表情をしてくれる。自分が何気ない気持ちでしたことで相手がすごく喜んでくれるという気持ちを身につけた。

・荷車を押してくれた友達

私の家では、昔は桃を作っていた。私が友達とドッチボールをして遊んでいた際、上り坂を私の両親が桃をたくさん積んだ荷車を引いていた。それを見た私の友達が「おまえのオトウやろう、みんなで押してやろう」と遊ぶのを止め、みんなが坂道を駆け上がり、両親の荷車を引いてくれた。その姿が照れくさいやら、嬉しいやら。

この3つが今の私を支えてくれた「土台」である。

5 私の実践

曙小学校(5年間)「しなやかな心を学ぶ意欲のあふれる曙っ子」

新市小学校(4年間)「豊かな心を持ち遊んで学ぶ新市っ子」

を学校教育目標として掲げた。

そして、教育ミッションである「明日の新市(曙)を拓く生きる力の育成」に向け、地域・保護者を巻き込んだ直接体験活動を軸として取り組んできた。

特に新市小学校では、各学年とも農作物を地域の人から指導を受けながら栽培することと、新市の人と徹底的に直接触れ合うこと。この2つのフィルターを通して農業を行う。決して質の良いものを作ることを目的としていない。土や虫とのふれあいや地域の人とのつながりを重視し、農業を通して自己効力感を身につけるために実施している。この取組は、教育ファームとして認定された。

・1年生 小菊(新市の特産)の栽培

収穫した小菊を花束にし手紙を添えて、子ども達が渡したい地域の人にプレゼントした。行き先は消防署、病院、郵便局、公民館、登下校の見守り隊の人等30箇所に入った。必ず一人一言地域の人と会話し、花束と手紙を渡した。地域の人からは喜びの手紙が学校に届き、その手紙を読んだ子ども達はそのお礼を言いに行く。地域の人とのかかわりはどんどん増え、新市では向こうの方から話しかけてくれる子が増えたという声が届いた。このような取組は、1年生～3年生の低学年が最も有効である。

・2年生 サツマイモ、キュウリ、ナスの栽培

「新市っ子まつり」でサツマイモの菓子を作り、各保育所の年長児を招待し交流を持った。

・3年生 アスパラガス(新市の特産)、ダイコンの栽培

女性会を招待し、ダイコンをおでんにして一緒に食べた。その時に、アスパラガスについて調べたことや聞き取ったことを発表した。

・4年生 黒大豆の栽培

食生活改善推進委員の協力を得て、味噌、梅酢煮、黒豆ご飯等を一緒に作って食べた。子ども達は大豆から味噌に変わることを知らなかったから、驚きのいい体験となった。その時に、大豆について調べたことや聞き取ったことを発表した。

・5年生 稲の栽培

田植えから水の管理、足踏み脱穀まで自分達で全て行った。老人会を招待し、おにぎりとう味噌汁と一緒に食べ、米作りについて調べたことや聞き取ったことを発表した。

・6年生 クワイの栽培(福山の特産、日本一の生産量)

田んぼへの植え付けから肥料、水の管理、害虫駆除、収穫まで自分達が行った。クワイの栽培は私が指導者となった。クワイは収穫まで水を張る。特に水の管理に気を使った。その後、見守り隊の人達を招待し、クワイの蒸しパン、からあげ等を作って食べた。その時、クワイについて調べたことや聞き取ったことを発表した。

・5年生の4泊5日の民泊体験

クラスがまとまらなかった5年生を何とかしたいと思い、北広島町の山中で4泊5日の民泊体験を実施した。出発するまでは保護者に対し3回説明会を行い、子ども達にも理解させ出発した。その後の保護者からの手紙の一部を紹介する。

「5年生の4泊5日の体験活動の話聞いたときに、学校はなんて無茶なことをしているんだろうと思いました。修学旅行よりも長い4泊5日、しかも全然知らない人の家に泊まるなんて。保護者の間で激震が走りました。我が子は出発の前日まで絶対行かないと涙して訴えます。家族で色々話し合い、出発

の朝やっぱり行くということになり、バスを見送りに行くと、涙を流す親の姿もありました。でもそんな親の心配を他所に子ども達が北広島の生活を満喫している様子を携帯で確かめられたときは、ほんとにうれしかったです。魚取りをしたこと、熊が残した爪痕を見たこと、遠くで黒く動く影をみたこととか、家にいたらできないような体験をたくさんして帰ってきて、思い出話に花が咲きました。無事で帰ってきて本当に良かったです。これから先何があってもこの体験学習を頑張ったことが必ず子供の自信に繋がるだろうと思っています。子どもはもちろんですが、親も大きな壁を乗り越えることができました。担任の先生には本当にお世話になり感謝しています。そして学校を挙げて子供達の世話をするために北広島に行って下さった先生方、本当にありがとうございました。校長先生が話されたように、子供達を北広島に連れて行って下さり本当に良かったです。ありがとうございました。」

6 取組の成果

- ・子ども達と地域の方との距離が大きく縮まった。
- ・心が穏やかになりとがった感情をぶつけることが少なくなった。
- ・相手の気持ちを考えて行動できる子が増えてきた。
- ・全校で3686通のお礼の手紙を発送し表現力・コミュニケーション力が高まった。
- ・保護者・地域からの学校に対する信頼が獲得できた。(保護者アンケート学校への肯定的評価94%)
- ・平成21年度全国学力テスト(6年)が広島県・全国平均を上回る。
- ・学校目標が達成できている。(保護者アンケート肯定的評価85%)
- ・給食の残量が激減した。(対策を講じていたわけではない)

このように、食育を通じた農業体験と地域の人とのかかわりを実施した結果、学力の向上・給食の残量激減等、他の項目に相乗効果が出た。食育とは生きる力を身につける効果があるということが、実践で証明されたように思われる。いかに土台をしっかりとしないと、後でものを植えてもしっかり育たないということを問題提起させて頂きたいのである。

◇質疑応答

Q: 学校で農業体験をしているが、子供たちが毎日できるわけではなく、ほとんど地域の方に任せている。先生が実施された取組活動では、子ども達は毎日どのようなことをしていたのか。

A: 毎日実施していたことは、稲の中や畑の草取り、水やり、肥料をやる等。稲とクワイはどうしても農薬を使用しなければならなかったため、農薬の散布は地域の方や教員が行った。地域の方からは指導は頂くが、指導者は一切手は出さず、ほとんど子供たちが行った。

Q: 通常の農業体験は収穫だけなどいいところ取りなのが多い中、最初から最後まで実施したのはとても素晴らしいと思った。

子ども達が農業体験を行う中で、どのように伝えて農業にかかわったのか。子供たちの気持ちをどのように高めたか教えて欲しい。

A: まず教員には、この農業体験はフィルターですよ、と伝えた。決して良いものを育てようとせず、子ども達ができることは全て子ども達がするということを徹底した。地域の人とコミュニケーションを取ることや地域の人にいろんなことを聞く、このフィルターを通して農業を行えば、自己肯定感等を養うことができる。お百姓さんにしてもらえば良いものができる、これではいけない。我々が狙っていることがぶれてはいけない。ぶれたら取組がどんどん崩れてしまう。

しかし、子ども達にそのようなことを伝えても理解できないから、子ども達が全部するのよと伝えれば子ども達は一生懸命する。子ども達にとっては、頑張ろう、力を合わせようと思うことがフィルターとなり、やさしさ、あたたかさ、心を育てることを学ぶことができるのである。